

佐藤成広作「自由③ 奪われざるもの」

- 効果音 (目覚ましのベル)
- 晃の母 晃、時間ですよ。もう起きなさい。
- 晃 あ～あ、毎日毎日、同じ時間に起こされるんだからかなわんぜ。
- 晃の母 何してんの。学校に遅れるわよ。
- 晃 分かったよ。今いくよ。
- ナレーション 彼の一日は、目覚まし時計に始まります。彼が通っている学校は、都内有数の受験校で知られた男子校。毎日が、勉強勉強の連続でした。
- 効果音 (始業のチャイム。教室のガヤ)
- 友達1 さーて、これからクラブへ直行するか。
- 友達2 お前はクラブやるのに学校来てるみたいだな。
- 友達1 おい、晃じゃないか。(晃に)おす！ おい、晃、ひよっとしてお前、学校に勉強しに来てんじゃないか？
- 友達2 勉強ばかりしてると、今に落ちこぼれるぞ。
- 一同 (笑い)
- 晃 (モノローグ)くそー。俺だって好き好んでガリ勉強してるわけじゃねえんだ。俺だってクラブもやりたいし、学校の帰りに茶店も寄ってみたいし…。一体どこの誰が好きで勉強ばかりして毎日を送るもんか！
- ナレーション 彼は、家に帰れば親から勉強を押し付けられ、学校ではクラスのみんなから、そんな彼の毎日を冷やかされるのでした。しかし、そんな晃にも、たった一つ、誰にも立ち入られない、彼だけの自由な時間がありました。
- 晃の母 晃、こんな時間にどこへ行くの？
- 晃 ああ、ちょっと、この前 借りたノート、返しに行ってくるよ。すぐ帰るからさ。
- 晃の母 ほんとにすぐ帰るんですよ。今があなたにとって一番大切な時期なんですからね。晃、分かってるの？
- 晃 はいはい、分かりましたよ。
- 効果音 (玄関の引き戸の音)
- 晃 (モノローグ)まったく、母さんたら。俺を自分の視野のうちに納めとかなないと気が済まないんだから。ほんとに参るよなあ。
- ナレーション 毎週、彼はこの日になると、友人の家にノートを返しに行くと言って、約束の場所へ行くのでした。その友とは、小学生の時から知り合いの女友達、富田恵子でした。学校が変わっても、高校2年の今日まで、彼女とは清らかな友情が続いていました。殺伐とした毎日の中で、彼女と会っている時だけが、彼にとって安らぎと人間らしさを取り戻せる唯一の時だったのです。
- 晃 やあ、ごめんよ。待ったかい？母さんがうるさくて。
- 富田恵子 ううん、そんなに。でも、週に1度しか会えないんだから、遅れないでね。
- 晃 ああ、君の言うとおりでだね。俺にとって君と会ってるこの時が、ほんとに俺に許されたただ一つの自由だよ。

恵子                    ありがとう。でも、本当に、毎日毎日、勉強ばかりよく続くわね。

晃                        そう言うけど、もう頭に来て全て投げ出そうと何度思ったかしれないよ。勉強してる時の俺は、自我を殺してる他人だよ。

ナレーション        ある時は勉強を教え合い、ある時は取り留めもなくおしゃべりをし、そしてある時はじっと黙ってレコードに耳を傾けながら、この二人だけの時間は、あつと言う間に風のごとく過ぎ去っていくのでした。

                              そんなある日、彼が恵子と会った次の日のことでした――。

友達1                  おい晃、昨日、いいとこ見ちゃったぜ！

晃                        え？ 何をだよ？

友達2                  お前、勉強しか能のないガリ勉野郎かと思っていたのに、なかなかやるじゃないか。

晃                        なんのことが、さっぱり分かんないぜ。変な言いがかりはよせよ、ほんとに！

友達1                  へえー、お前でも怒るのか！（みんな笑い）

ナレーション        そして、次の日、彼は担任の先生に呼ばれました。

先生                    ああ、君か。まあ掛けろよ。（間）実はこの間、君がかわいい女の子と公園で話しているのをご注進に及んだやつがいるんだが、まあ、そんな息抜きもたまにはいいだろう。だが、知つてのとおり、お前にとってはこの半年が勝負だ。なりふり構わず勉強しないと、一流どころはととも無理なことは分かっているはずだぞ。そのところをよ〜く考えて、ほどほどにするんだな。

晃                        （モノローグ）くそー、冗談じゃない。俺の、俺の楽しみを、たった一つの自由を、あいつらなんか束縛されてたまるか！ もしあいつらが、このことを母さんに話しでもしたら、どうすればいいんだ？ 失いたくない。これだけは絶対に失いたくない！

<完>